

玉川の丘音楽協会

サマーコンサート

2018年8月12日(日)

1:30PM 開場, 2:00PM 開演

終演 4:05(予定)

入場無料

グリーンホール相模大野多目的ホール

玉川の丘音楽協会 町田市玉川学園 5-5-18 TEL042-732-7301

玉川の丘音楽協会 ← Web 検索

1965 年創立の「玉川の丘音楽協会」(略称:たまおんきょう)は、第一線で演奏するプロから純粹のアマチュアまで、年齢も職業も多様なメンバーで、継続的に活動しています。

普段はサロンコンサートでお互い演奏して聴きあっていますが、年に1回程度、外部の皆さまに聴いていただく機会を設けています。

みな楽しみながら、しかし一生懸命演奏します。ごゆっくりお聴きください。

*****演奏曲目*****

(1) **バッハ** ブランデンブルク協奏曲 第3番ト長調 BWV.1048 より
第1楽章

合奏:玉川の丘音楽協会合奏団

合奏団メンバー(パート別 50音順)

第1ヴァイオリン:伊藤さやか, 井上典子, 前田泉

第2ヴァイオリン:石川博之, 源田泰子, 関健

第3ヴァイオリン:酒井健一, 新海嘉之, 関裕子

第1ヴィオラ:永岡京子

第2ヴィオラ:松本洋子

第3ヴィオラ:菅谷正美

第1チェロ:福田武郎

第2チェロ:石井久美, 前田貞子

第3チェロ:米塚佑子

(2) **ベートーヴェン** ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調 作品13 “悲愴”

第1楽章 グラーヴェ→アレグロ・ディ・モルト・エ・コン・プリオ

第2楽章 アダージョ・カンタービレ

第3楽章 ロンド, アレグロ

ピアノ:末松茂敏

(3) **レナード・バーンスタイン** 「キャンディード」序曲

サミュエル・バーバー 組曲「思い出」作品28 より

1番 ワルツ, 2番 スコットランドのダンス, 5番 ためらいのタンゴ, 6番 ギャロップ

ピアノ連弾:蓼沼明子, 永岡京子

===休憩 15分===

(4) **フォーレ** ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ長調 作品13

第1楽章 アレグロ・モルト

第2楽章 アンダンテ

第3楽章 アレグロ・ヴィーヴォ

第4楽章 アレグロ・クワジ・プレスト

ヴァイオリン: 吉川秋子 ピアノ: 高野京子

(5) **モーツァルト** ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488 室内楽版

第1楽章 アレグロ

第2楽章 アダージョ

第3楽章 アレグロ・アッサイ

ピアノ: 金田友理 合奏: 玉川の丘音楽協会合奏団

合奏団メンバー(パート別 50音順)

ヴァイオリン: 石川博之, 伊藤さやか, 井上典子, 源田泰子,
酒井健一, 新海嘉之, 関健, 前田泉

ヴィオラ: 菅谷正美, 永岡京子, 松本洋子

チェロ: 石井久美, 福田武郎, 前田貞子, 米塚佑子

フルート: 関裕子, 平良啓 クラリネット: 金指崇 コーラングレ: 佐々木恭子

*******作曲者ミニ紹介*******

バッハ(1685~1750)の「**ブランデンブルク協奏曲**」という曲名は作曲者が付けたものではありません。「バッハ伝」の著者である音楽学者シュピッタ(1841-94)によるものです。バッハがこの曲集をブランデンブルク辺境伯に捧げたときのタイトルは、「幾つもの楽器による協奏曲集」という意味のフランス語 “*Concerts avec plusieurs instruments*” でした。作曲当時のバッハはケーテン宮廷楽長で、この曲集はケーテン楽団の高い演奏技術を反映しています。

本日演奏する「**協奏曲第3番**」は古いタイプの「**ヴィオール族***」と異なる、最新の「**ヴァイオリン族**」の鋭い音色と機敏な運動性を発揮させる為に、3部のヴァイオリン、3部のヴィオラ、3部のチェロの合計9声部という大編成で書かれました。ヴァイオリン族の宣伝とも言えるべき、空前絶後の作品です。ト長調で書いたのもヴァイオリン族3種類に共通する開放弦の響きを生かすためです。バッハはオルガンとチェンバロの巨匠ですが、弦楽器の演奏技術にも詳しくたのです。

(***ヴィオール族**の代表はヴィオラ・ダ・ガンバです。指板にギター風のフレッドが付いており、温和な音色で鳴ります)

ベートーヴェン(1770~1827)はウィーンでピアノの名手として売り出しました。**ピアノ・ソナタ第8番 “悲愴”**を1799年出版するや、楽譜の売れ行きは上々。ピアニストのみならず気鋭の作曲家でもあったと知らしめた重要作品です。出版譜のとびらにある「大いなる悲愴ソナタ」=“*Grande Sonate pathétique*” というフランス語のタイトルは作曲者が了承したものと考えられます。彼自身の付した表題は他に「告別ソナタ」作品81があるのみです。

「悲愴ソナタ」の美しい旋律と深い情感は、レントの名付けたベートーヴェンの三区分の《初期》を代表するにふさわしく、後の作曲家たちに少なからぬ影響を及ぼしたことでしょう。譜面を購入して悲愴ソナタを弾いたピアニストは大勢いましたが、ベートーヴェン自身が演奏するときは「レガートタッチ」を駆使し、まるで未知の新曲のように響いたと言われます。偉大な演奏家である彼は、自作の最高の解釈者でもあった訳です。ベートーヴェンのソナタ中の人気作は《悲愴》、《月光》、《熱情》の3つでしょうが、《熱情》と《月光》は作曲者没後に他人が与えた愛称です。

バーンスタイン(1928-90)はアメリカ東部マサチューセッツ州でウクライナ系ユダヤ移民の家に生まれ、衣料品販売の父の望みに応えて、エリートコースであるボストン・ラテン語学校／ハーヴァード大学を卒業、カーティス音楽院でも学び、アメリカを代表する指揮者、ウェストサイド・ストーリーの作曲家、TVの音楽教養番組の司会者という、八面六臂の才人でした。**キャンディード**は哲学者ヴォルテールの著した諷刺小説に基くオペラですが、日本では吹奏楽の為の組曲や、本日演奏する『序曲』の形態で親しまれています。バーンスタインの弟子佐渡裕さんが「題名のない音楽会」のテーマとして演奏していたのは懐かしいですね。

バーバー(1910-81)はアメリカ東部ペンシルベニア州生まれ。バーンスタインと対照的に、独立戦争以来の名門の家柄で、父は外科医、母はピアニストという恵まれた環境で育ちました。カーティス音楽院を出た後ローマに留学し、ネオ・ロマンティックな作風で多くの作品を残し、歌曲は英語圏の歌手にとって重要な作品とされますが、大陸ヨーロッパで必ずしも名声を持たなかったようです。**組曲「思い出」**は男女の逢いと情事を描いたストーリー性のある作品。楽章ごとに副題がつきます。本日は(1)(2)(5)(6)を演奏します。聴いて情景を想像するのも楽しいでしょう。

(1)ワルツ(ホテルのロビーにて)、 (2)スコットランド舞曲(3階の廊下)、
(3)パ・ドゥ・ドゥ(ダンス・ホールの片隅) (4)ツー・ステップ(パームコートでのティータイム)、
(5)ためらいのタンゴ(ベッドルームで) (6)ギャロップ(次の日の昼下がり、浜辺にて)

フォーレ(1845~1924):はフランス最南部の奥地にあるミディ=ピレネー県の生誕ですが、同郷の有名人は各分野を通じて殆ど居ません。この時代フランスのエリートはパリの周辺から出た場合が多く、音楽家も大抵は遅くとも父の代にパリ周辺に出てきています。ベルギー生まれのセザール・フランクは言葉の訛りで、パリっ子のサン＝サーンスと取り巻きに虐められました。南フランスを題材にした傑作《アルルの女》を書いたビゼーなども実はパリ生まれです。近代の「フランス6人組」でようやく南フランス出身のミヨーが活躍するようになりました。フォーレは幼少期にパリのカトリック系の音楽学校に寄宿して教育を受け、方言のハンディが無かったのでしょう。人格的にも尊敬を集め、パリ音楽院の院長を務めるなどしました。

カトリックのオルガニスト出身らしい堅固な作曲技法の中に、南仏の血に由来する熱情を秘めるのが魅力的です。日本ではピアノ曲や歌曲、レクイエムが人気ですが、室内楽にも多数の傑作があり、本日演奏する**ヴァイオリン・ソナタ第1番**はヴァイオリンとピアノの為のソナタというジャンル中で極めて高い人気を誇っています。モーツァルトの2倍、60年も創作を続けたフォーレの、若かりし30歳前後の作品です。

モーツァルト(1756~1791)は教会領のザルツブルクで、宮廷楽師の子として育ちました。大司教は世襲でない為、代替わりで宮廷は一変します。新着任の大司教に寵愛されなかったことで、プライドの高いモーツァルト青年は嫌気がさし、当時珍しい「フリーの音楽家」としてウィーンで活動を始めます。ピアノの名手の彼は人気者で、近年の研究発表によれば、年収は宮廷楽長サリエリよりかなり高額で、贅沢な暮らしが出来た筈です。

ところがモーツァルトは借金も莫大でした。借財の原因には諸説あり、妻のコンスタンツェが浪費家だとか、モーツァルトに賭博癖があったとか、はたまたフリーメーソンに寄付したとか、今後の研究に俟つとされ真相はよく解りません。いずれにしても「モーツァルトはウィーンの市民に飽きられて不遇をかこち、みじめな晩年を迎えた」という俗説は疑問のようです。マリア・テレジアの息子の皇帝ヨーゼフ2世も彼を最良にしました。

モーツァルトのピアノ協奏曲は27曲あり、17曲はウィーンでの作です。スターピアニストである自身が弾くための新作の協奏曲が必要だからです。当時流行のイタリア語のオペラの様式を用い、ピアノ奏者が歌手の役割を演じます。

晩年(と言ったって30歳以降!!!フォーレと比較してください)のモーツァルトはバロック音楽を研究したため。華麗な筈のピアノ協奏曲にさえ悲劇性や奥深い情緒性が増して行きました。1786年作で本日演奏する第23番イ長調K.488は現代でも人気上位の作品ですが、嬰へ短調という変わった調で書かれた第2楽章の深い感情性はショッキングでさえあります。